

ヒルメッド カストロビージョ・チタン持針器 との出会い

機器を選ぶについて、私は非常に悩む。
それが私にとって本当にいいものかどうか分からないからだ。

DOC インプラント大阪
岡田歯科医院
(大阪市北区)
院長 岡田 修二



著名な先生であれば、メーカーもいろいろ貸してくれるだろうし、相談にも乗ってくれるだろう。

ことによってはその先生のオリジナルのデザインで新たに製作してくれることだってあるだろう。

しかし、一般の歯科医である私などのような人間では、それは不可能。

たまにデンタルショー等にこのこと出かけて行き、良くて数社の製品を手にとって見てみるくらいしかできない。確かにそれほどの高額商品でもないのだから、拘りもほどほどでいいのかもしれないが、いやいや、腐っても歯科医である、自負だけで生きているような人間にとってはここに拘りを持たずにどこに持てと言うのか。可能ならすべてのメーカーの商品を確かめてみたい。

それが適わない現実があるのであれば、我々はどうやって商品を選べばいいのか。

こんな話がある。

ある大学の研究室で、実験用の機器を作ることとなった。

その製作にはある日本人が担当し、見事に美しい機器を作り上げた。

研究室の人間がすべて集まりその担当者から使い方のレクチャーを受けていた。

説明は進み、しかしあるところでその担当者が注釈をつけた。

「この機器を扱うにはこのポイントで、ちょっとしたコツがある。」

ほとんどの研究員はなんの疑問もなく、そのレクチャーを聞いていたが、ある留学生が待ったをかけた。

「コツなどが必要などというのはおかしいのではないか？」

研究室の責任者は、その留学生にも同じ実験用の機器を作らせてみることにした。さて留学生が作り上げた機器は、それはとてもじゃないが美しいなどと言えるシロモノではなかった。しかし、いかなる「コ

ツ」も必要とせず、過（あやま）たず実験をこなした。

この話は日本人と欧米人との資質の違いを表したお話ではあるのだが、私は機器を選択しようとする時いつもこの話を思い出す。

つまり、機器を選択し、それを実際に使うという事において、我々は機器を二つの方向から考えることとなる。

まず、選択の段階では自分の必要なことがクリアされているのかどうかを確認する必要がある。ここが最低条件となる。

実際にモノに触れることが出来るならば、自分の手に馴染むのかどうか、自分の感性に合うのかどうかを確認する必要がある。手に馴染むのか、感性を逆撫でしないのかどうかは、現実に現場にならないとわからないものではあるが、それでも確認する必要がある。

そして購入するかどうかの判断は、ここで行わないといけな。

実際に機器を購入し、自分のアイテムとして現実の臨床の場に挑んだ時、もはやその機器が使いやすいかが使いにくかろうかもはや関係はない。

コツが必要だろうがそうでなかろうが、我々は目的の手技を完結させるまでその場から逃げることができない。その機器のクセまで全て飲み込んで、習熟しなければならない。

こう考えていくと、機器の選択というのは実は非常に難しいことがわかる。

基本性能がクリアされている事は最低条件ではあるが、本当に納得できる機器であるのかどうか判断できるのは、実際にある程度の時間が必要なのだ。

最初はなんだか使いにくかったが、だんだん手に馴染んで愛着さえ感じ、手放せなくなるような機器もあるし、逆に、最初は素晴らしいと感じたが、だんだん嫌になっていく機器だってある。

もはや機器の選択は、運任せなのではないかとも思ってしまうが、それでも我々は選択していかなければならない。

今回、新しい機器を購入した。

なんとすることも無い持針器なのだが、いやいやこういうものにこそ拘りが必要なのだ。

単なるコーティングではないオールチタン製で軽いというのは素晴らしい。ダイヤモンドコーティングなんていう処理もされていて、これも滑ってしまう不快な感覚とは無縁のもので、さらにデザインが引っかけりなく出来ているため糸のすべりが良い。つまり、術者に機器を扱っている感覚が非常に少なく、考えることなく自分の意図のままに動いてくれる感覚は、初めて経験したものだ。

それにも増して私が大切に思うのは、私がこの持針器を何故だか気に入ってしまったこと。

結局のところ、これが一番大切なかもしれない。

この持針器を使うことに喜びを感じる。

ストレスを感じないだけでなく、プラスアルファがある。

大きさに聞こえるかもしれないが、この持針器と出会えたことに感謝したい。

こいつのおかげで自分がステップアップできるような気がしている。